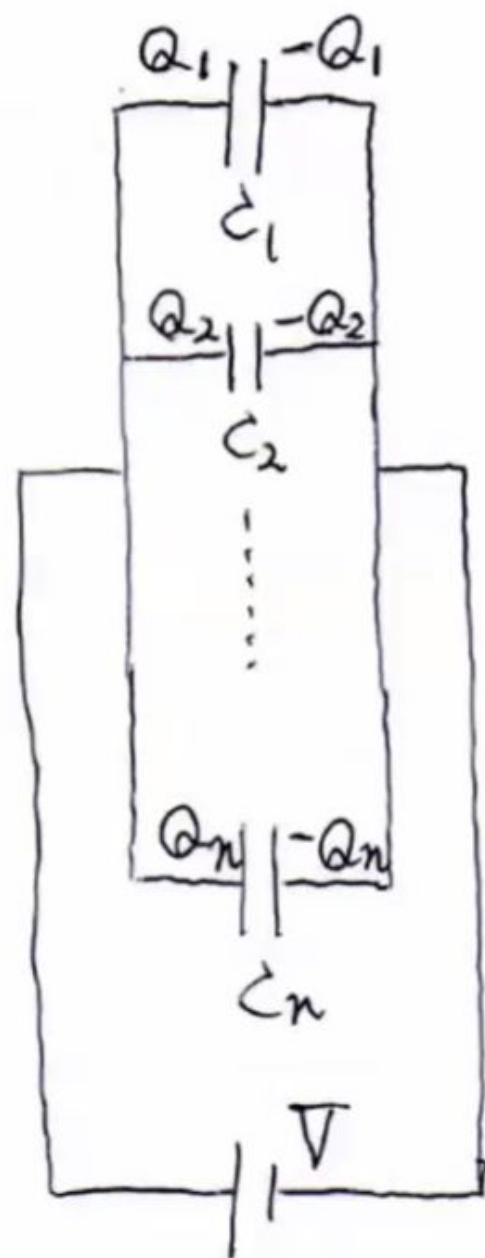


材料の物理1

第12回目

○ コンデンサーの接続 (連結)

• 並列接続



全てのコンデンサーの電位差(電圧)は等しく、 V 。

i 番目のコンデンサーに蓄えられる電荷は、 $Q_i = C_i V$ 。

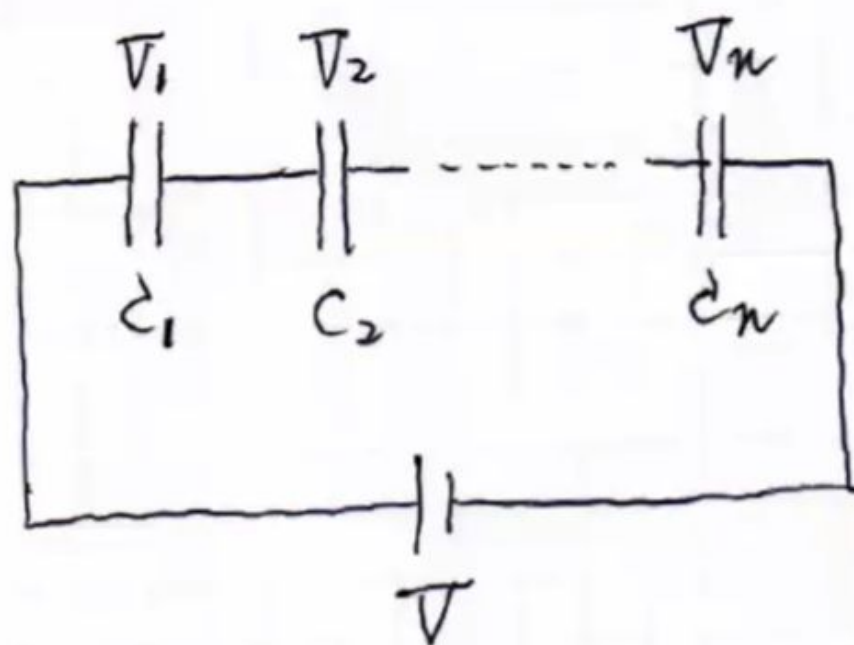
ゆえに、全体の電荷は、

$$Q = \sum_{i=1}^n Q_i = \sum_{i=1}^n C_i V。$$

合成電気容量 C は、

$$C = \sum_{i=1}^n C_i \quad // \text{ (並列) }$$

• 直列接続



$$V = \sum_{i=1}^n V_i$$

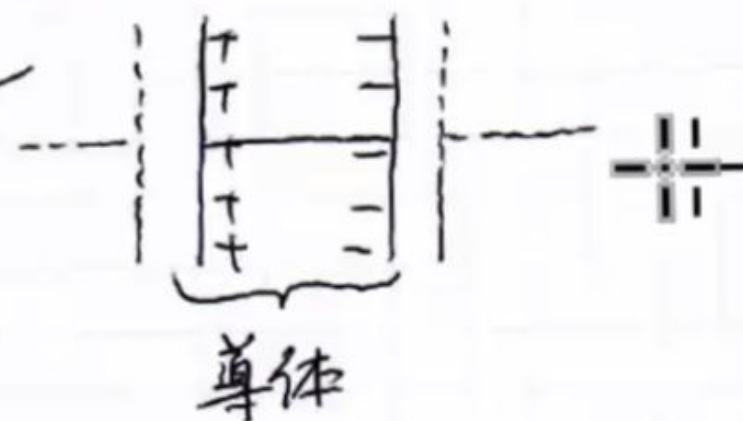
隣り合うコンデンサーの極板の電荷は互いに打ち消し合うので、 $Q_i = Q$ で全コンデンサーに共通。

$$\Rightarrow V_i = \frac{Q_i}{C_i} = \frac{Q}{C_i} \text{ あり、}$$

$$V = \sum_{i=1}^n V_i = \sum_{i=1}^n \frac{Q}{C_i}$$

よって、合成電気容量は、

$$\underline{\underline{\frac{1}{C} = \sum_{i=1}^n \frac{1}{C_i} \quad // (直列)}}$$



6.2 誘電体

○電流を流さない絶縁体

↓ \hookrightarrow 電氣的に不活性か? \Rightarrow No!

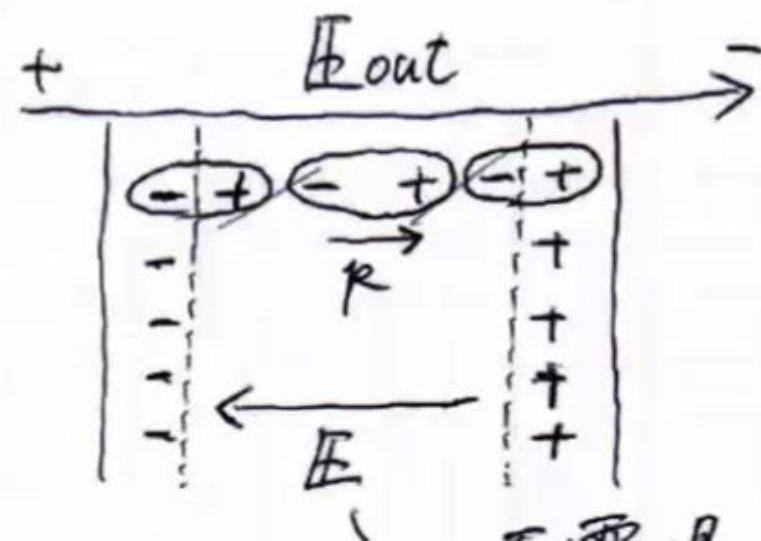
電場により電気分極が生じる(変化する) \leftarrow

\hookrightarrow 分極電荷により電場が生じる(変化する)

※両者のつじつまを合わせる必要あり

\hookrightarrow 電束密度(電気変位)という場の導入

絶縁体 \Rightarrow "誘電体"

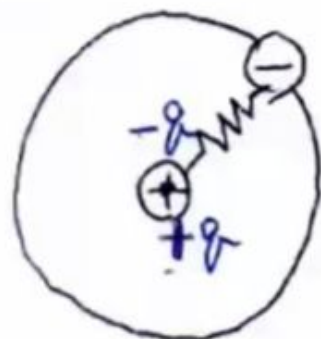


cf. 導体は外部電場を
完全に打ち消す
 \hookrightarrow 導体内は
 $E=0$

電気分極

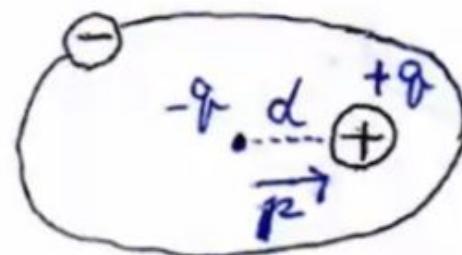
- 絶縁体(誘電体) → 自由に動ける電荷なし

原子内



$$E=0$$

$$\text{双極子モーメント: } p = qd = 0$$

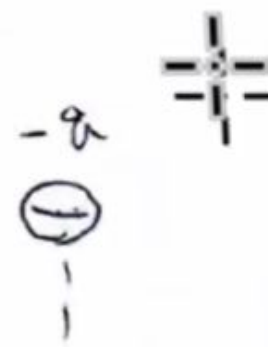
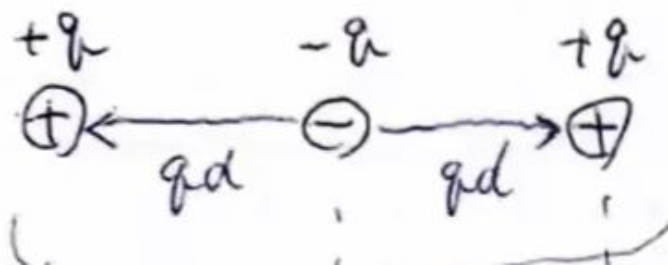


: 電子分極

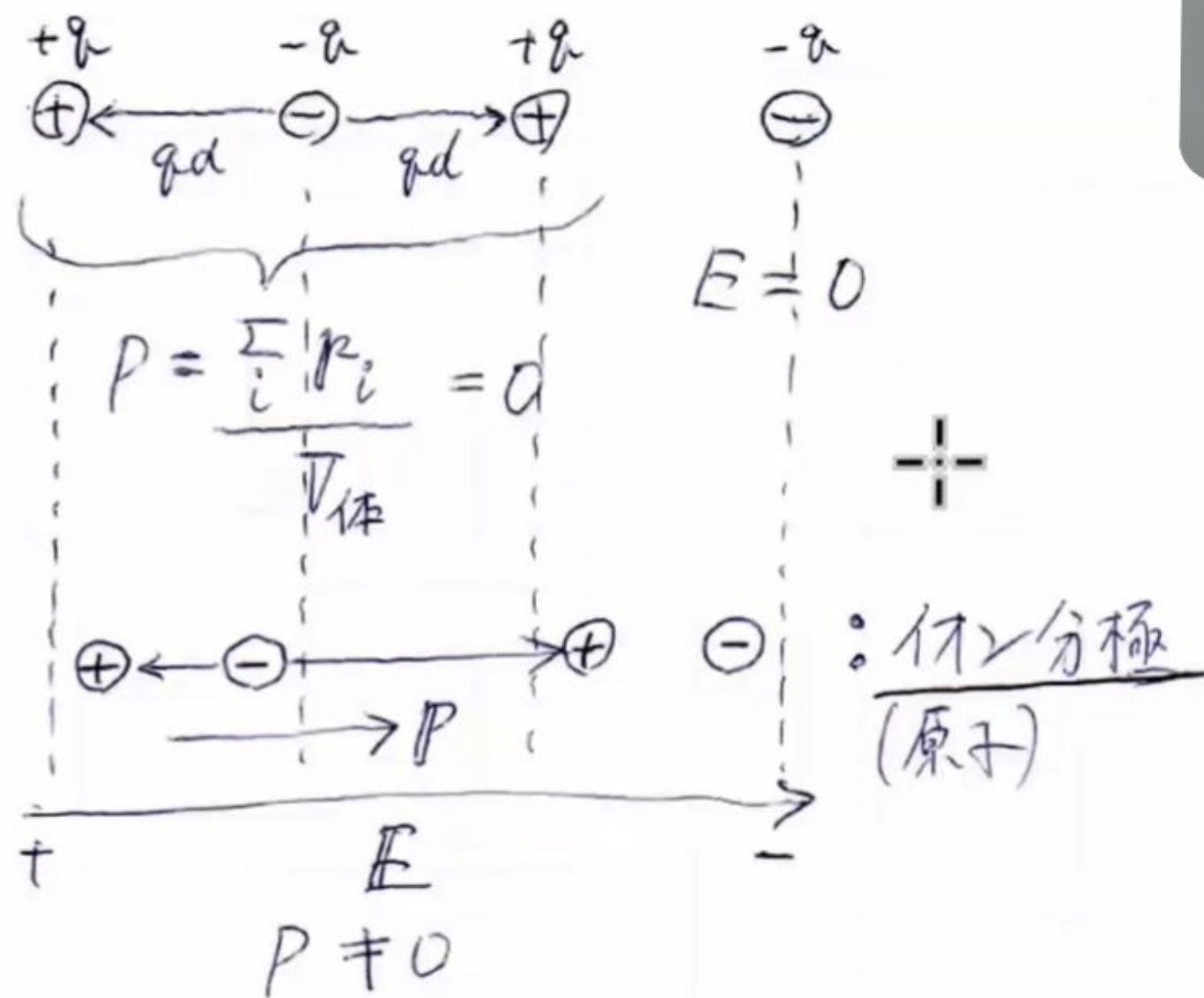


$$p = qd \neq 0$$

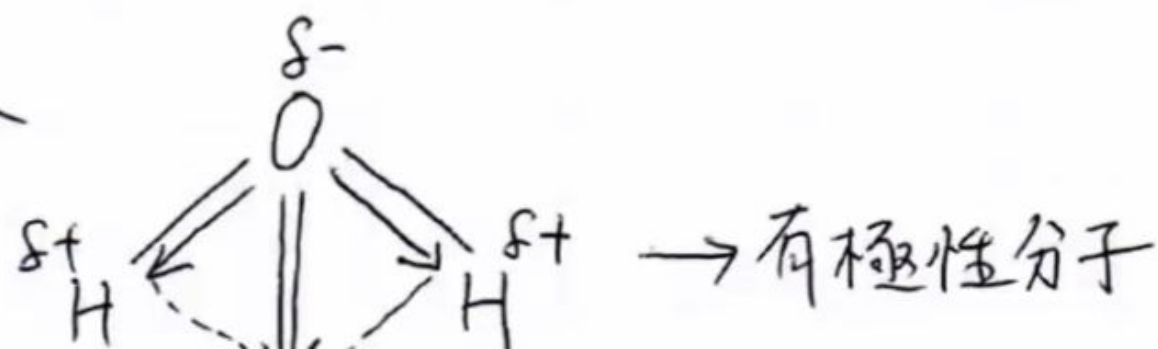
分子結晶
(例 Na^+Cl^-)



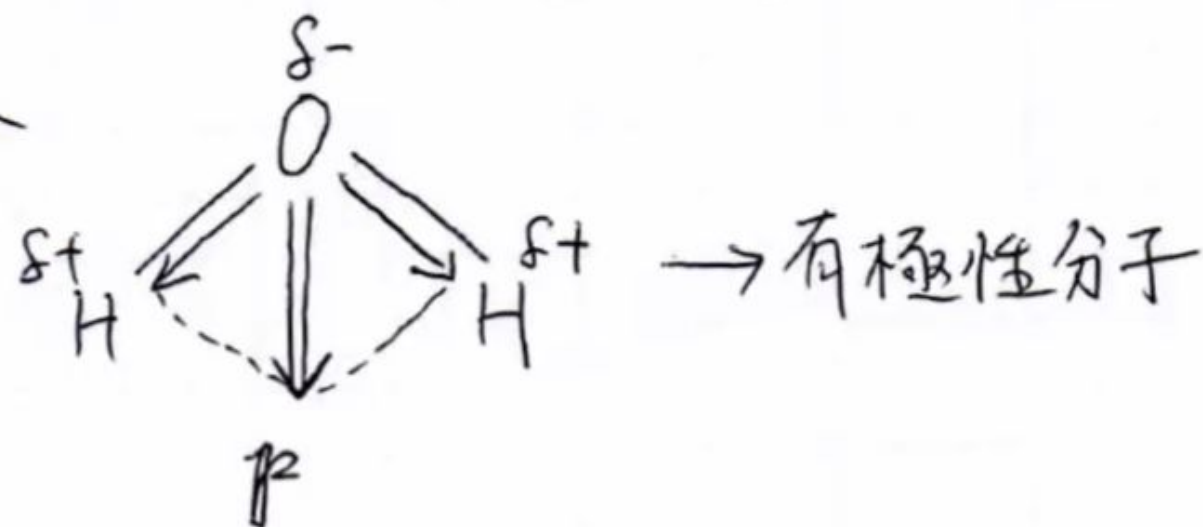
イオン結晶
(例 $\text{Na}^+ \text{Cl}^-$)



分子 例: 水

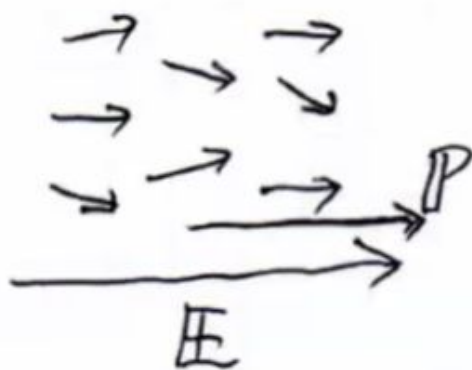


分子 例: 水



$$E = 0$$

$$P = 0$$



$$P \neq 0$$

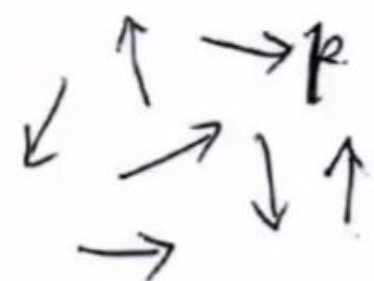
: 配向分極
(双極子)

$E = 0$ のとき $P = 0$
 $E \neq 0$ " $P \neq 0$

⇒ 常誘電体

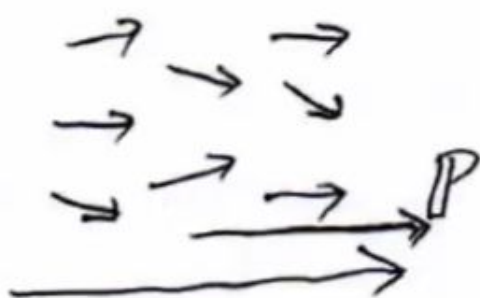
→ P は E に比例する。

$$P = \epsilon_0 \chi E$$



$$E=0$$

$$P=0$$



$$E$$

$$P \neq 0$$

: 配向分極
(双極子)

$E=0$ のとき $P=0$
 $E \neq 0$ " $P \neq 0$

⇒ 常誘電体

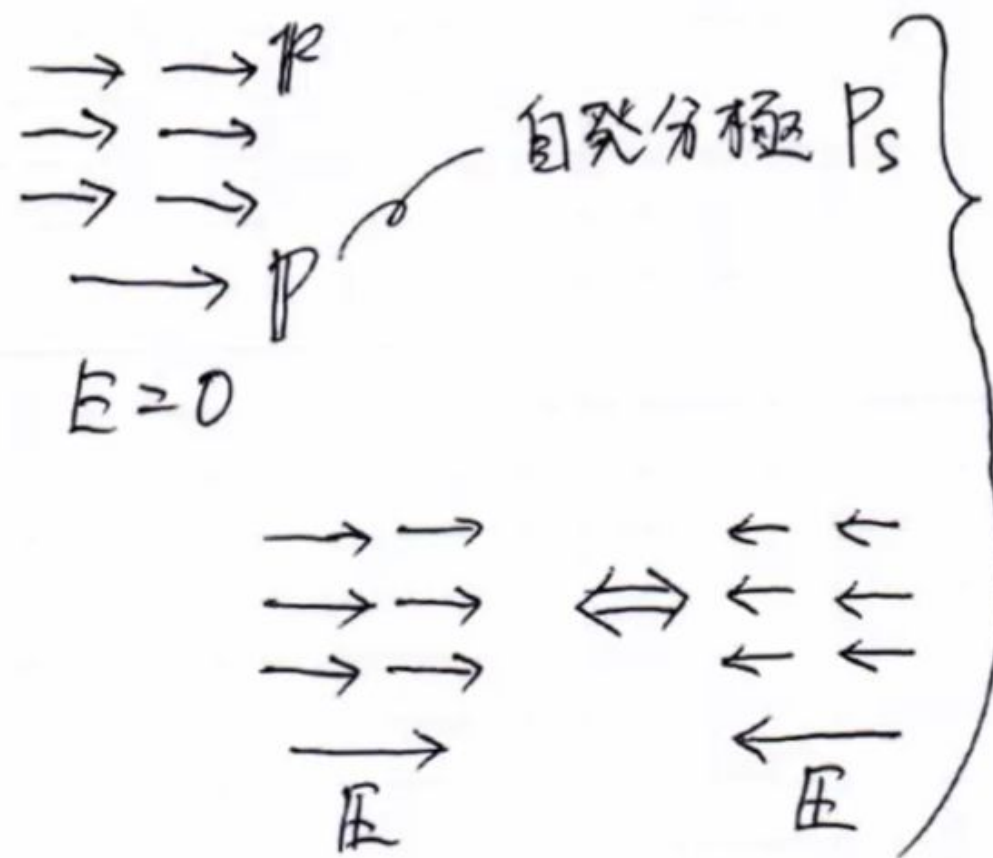
→ P は E に比例する。

$$P = \epsilon_0 \chi E$$

電気感受率



- $E=0$ でも $P \neq 0$ の物質あり



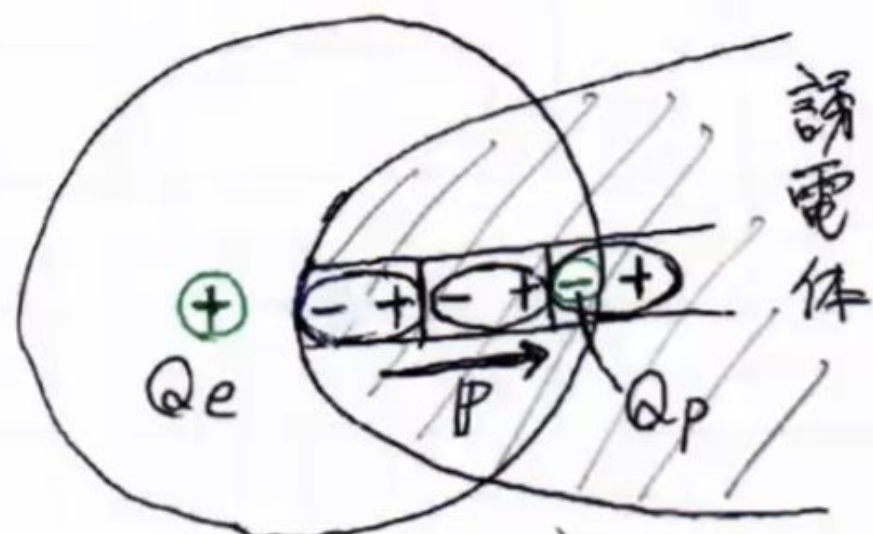
P_s をもち、
その向きを E で
反転できる物



強誘電体

○ ガウスの法則と電束密度

○ ガウスの法則と電束密度



ガウス曲面 S

誘電体が存在する空間の中に
閉曲面 S を考える。

ガウスの法則

$$\epsilon_0 \int_S \underbrace{E_n}_{\text{外部電場+反電場}} dS = \underbrace{Q_e}_{\substack{\text{S内の} \\ \text{外部電荷}}} + \underbrace{Q_p}_{\substack{\text{S内の} \\ \text{分極電荷}}}$$

微小領域全体が S の内側にあるものは、
打ち消し合って分極電荷は 0。

↓

S によって切断された部分の分極電荷が残る。

$$\longrightarrow Q_p = - \int_S P_n dS$$

Q_e と逆

分極 (電荷密度)



ガウス曲面 S

ガウスの法則

$$\epsilon_0 \int_S \underline{E_n} dS = \underbrace{Q_e}_{\substack{\delta \text{ 内の} \\ \text{外部電荷}}} + \underbrace{Q_p}_{\substack{\delta \text{ 内の} \\ \text{分極電荷}}}$$

外部電場 + 反電場

微小領域全体が S の内側にあるものは、
打ち消し合って分極電荷は 0。

↓
 S によって切断された部分の分極電荷が残る。

$$\longrightarrow Q_p = - \int_S P_n dS$$

Q_e と逆

分極 (電荷密度)

(P の S に対する外向き法線
方向の成分)

よって、

$$\int_S (\epsilon_0 E_n + P_n) dS = Q_e$$

$\epsilon_0 E + P \equiv D$: 電束密度 (電気変位)

$$\underline{\int_S D_n dS = Q_e}$$

• 真空中では $P=0 \rightarrow D = \epsilon_0 E$ \vdots

(常)誘電体では $P = \epsilon_0 \chi E \rightarrow D = \epsilon_0 (1 + \chi) E$

電気感受率 $= \epsilon_0 \epsilon_r E$

$= \epsilon E$

ϵ : 物質の絶対誘電率

$\epsilon_r = \frac{\epsilon}{\epsilon_0}$: 真空に対する比
→ 比誘電率

δ によって切断された部分の分極電荷が残る。

$$\longrightarrow Q_p = - \int_{\delta} P_n d\delta$$

Q_e と逆

分極 (電荷密度)

(P の δ に対する外向き法線
方向の成分)

よって、

$$\int_{\delta} (\epsilon_0 E_n + P_n) d\delta = Q_e$$

$\epsilon_0 E + P \equiv D$: 電束密度 (電変位)

$$\int D \cdot d\delta = Q_e$$

よって、


$$\int_S (\epsilon_0 E_n + P_n) dS = Q_e$$

$\epsilon_0 E + P \equiv D$: 電束密度 (電気変位)

$$\underline{\int_S D_n dS = Q_e}$$

• 真空中では $P=0 \rightarrow D = \epsilon_0 E$

(常)誘電体では $P = \chi E \rightarrow D = \epsilon_0 (1 + \chi) E$


電気感受率

$= \epsilon_0 \epsilon_r E$
 $= \epsilon E$

ϵ : 物質の絶対誘電率

$\epsilon_r = \frac{\epsilon}{\epsilon_0}$: 真空に対する比
→ 比誘電率

(例)誘電体では $D = \epsilon_0 \epsilon_r E \rightarrow D = \epsilon_0 (1 + \chi) E$
 ϵ_r : 電気感受率
 $= \epsilon_0 \epsilon_r E$
 $= \epsilon E$

ϵ : 物質の絶対誘電率

$\epsilon_r = \frac{\epsilon}{\epsilon_0}$: 真空に対する比
 \rightarrow 比誘電率
 (相対)

• ガウスの法則

$D = \epsilon E$ より、

$$\int_S D_n dS = \epsilon \int_S E_n dS = Q_e$$

※ 真空中のガウスの法則の ϵ_0 を
 ϵ に代えただけ